

2020 東京五輪 聖火が再び須賀川へ!

生涯学習スポーツ課 ☎(88)9174

2020東京五輪の聖火リレーのルート概要が、6月1日に公表され、本市が県内ルートの一つとして選ばれました。夏季五輪としては、前回の東京五輪から55年振りに、聖火が再び本市を通過します。

本市の通過は 来年3月28日(土)

2020東京五輪の聖火リレーは、来年3月26日(木)に、Jヴィレッジ(栃木・広野町)を出発し、約4か月かけて全国を駆け巡り、7月24日(金)に、東京の国立競技場に到着します。

県内では、スタートから3月28日(土)までの3日間、25市町村を巡り、本市は、3日目となる28日に通過します。

1964年東京五輪のマラソン競技で銅メダル獲得の偉業を成し遂げ、当時の日本陸上界の救世主となった円谷幸吉選手のふるさとである



1964年、東京五輪のマラソンで銅メダルを獲得した円谷幸吉選手

本市では 3度目の聖火リレー

本市での聖火リレーは、1964年の東京五輪、1972年の札幌冬季五輪に続き3度目になります。

前回の東京五輪の聖火リレーは、1964年9月30日に本市を通過しました。当時の「大谷地入口停留所」から「二里垣給油所」までの4区間で、各区間において正走者1人、副走者2人、随走者約20人で構成されました。

世界的な世紀のイベントを一目見ようと、大勢の市民が沿道を埋め尽くし、マラソンに出場する幸吉選手を応援するとともに、東京五輪を大いに盛り上げました。

聖火リレーのルートは 年末までに決定

2020東京五輪の聖火リレーは、各市町村1区間となります。本市の区間は約2キロメートルで、ランナーは10人程度、1人当たり約200メートルを走る予定です。

具体的な走行ルートや区間については、県実行委員会などと協議の上、年末ごろに決定される予定です。

ランナーは 8月末まで一般公募

本市を走行する聖火リレーのランナーは10人程度が予定されていて、その約半数は、県実行委員会とスポンサー企業4社がそれぞれ公募しています。

県実行委員会とスポンサー企業4社に1回ずつ、最大1人で5回まで応募でき、8月31日(土)まで申し込みを受け付けています。

なお、聖火リレーのランナーは、年末ごろに決定される予定です。詳しくは、県実行委員会及び各スポンサーの募集要項をご覧ください。

聖火ランナー募集 検索が



1964年東京五輪の聖火リレーは9月30日に行われ、大勢の市民が国旗を手に沿道で応援しました。また、円谷幸吉選手の母校である須賀川高校の生徒が、サルビアの鉢植えを抱えながら声援を送りました(写真は現在の本町「結の辻」付近)

もう一つの「聖花」リレー

世代をつなぐ「サルビアの道」

1964年東京五輪の聖火リレーでは、まちなかの沿道に「サルビアの道」が創られました。サルビアの花が聖火のトーチに似ていることから、聖火を歓迎しようである円谷幸吉選手を応援しようと、母校である須賀川高校の生徒会が自ら立ち上がり実現したものです。

2020年東京五輪に向け、「サルビアの道」復活と、幸吉選手を顕彰するため、「円谷幸吉・レガシーサルビアの会」が平成30年12月に発足しました。本市らしい聖火リレーを目指して、関係機関などの協力を得て準備を進めています。



幸吉選手の兄・喜久造さんが大事につないできたサルビアの苗を一本一本丁寧に植える第一中生徒(6月10日)

サルビアをつないだ2人の円谷

「サルビアの道」復活に向けたサルビアの苗は、幸吉選手の兄・喜久造さんによって、半世紀以上にわたり大事に育てられてきました。

きっかけは、もう一人の「円谷」が関係します。特撮の神様、円谷英二監督の甥・英二監督の兄・一郎の子に当たる円谷修三さんです。

幸吉選手、喜久造さん、修三さんは、1957年に行われた異縦断駅伝大会における「須賀川クラブ」のチームメイトでした。

1964年9月に聖火リレーが通過し、オリンピックも幕を閉じた10月、修三さんが、練習コースとして須賀川高校で役目を終えたサルビアが咲いているのを見つけ、農作業のため聖火リレーを見ることができなかった喜久造さんに、一輪のサルビアを届けてくれました。



喜久造さんと一緒にサルビアの苗を植える第一小児童(6月6日)

兄・喜久造さんのサルビアにかける思い

喜久造さんは、幸吉選手の生家(大町地内)の庭で大事にサルビアを育ててきました。生家は、毎年10月に行われる円谷幸吉メモリアルマラソン大会のコース沿いにあり、サルビアは毎年多くのランナーを、そつと応援し続けてきました。

喜久造さんは、サルビアの花をマラソン選手に例え、「大事に一生懸命育てれば、期待に応えて、きれいな真っ赤な花を咲かせてくれます。そんなサルビアが大好きです」と、サルビアを育て続けてきた思いを語ってくれました。

幸吉選手の後輩がサルビアの苗植え

「円谷幸吉・レガシーサルビアの会」では、幸吉選手の母校である第一小と第一中の児童・生徒と共に、喜久造さんにつないできたサルビアの苗をプランターに植えました。

会員に見守られる中、6月6日は、第一小の6年生68人が約400鉢、6月10日は、第一中の全校生徒250人が約500鉢を一本一本丁寧にプランターに植えました。

このサルビアは、7月中旬から松明通りをメインに「サルビアの道」として飾られる予定です。

みんなで聖火リレーを盛り上げましょう

「円谷幸吉・レガシーサルビアの会」では、「サルビアの道」復活のほか市民の皆さんを対象にシンポジウムなどの開催を予定しています。

赤いサルビアの花言葉は「燃える思い」です。

55年振りに復活する「サルビアの道」による情熱の赤で、再び本市を通過する聖火リレーを、皆さんで盛り上げていきましょう。



円谷幸吉選手の兄

円谷 喜久造さん

サルビアで聖火リレーを応援

東京五輪が終わった年の10月に、円谷英二監督の兄の子・修三さんが須賀川高校からサルビアを持ってきてくれました。このサルビアから今日まで種を引き継いできました。

サルビアの花は、聖火のトーチに似ていて、8月頃に切り戻しをすると、切ったところから脇芽が出てき

ます。そして、10月に再び元気に返り咲きます。

ちょうどこの時期は、円谷幸吉メモリアルマラソン大会が行われ、まるでランナーを応援しているかのようです。

55年前の聖火リレーは、弟の応援に行くため、父親と農作業を優先し見ることができませんでした。

来年の聖火リレーは、引き続き継いできたサルビアと共に弟・幸吉の思いを胸に聖火ランナーを応援します。

幸吉選手の偉業を伝えたい

1964年の東京五輪の聖火リレーが須賀川を通過するとき、当時の須賀川高校の生徒は、沿道でサルビアの花を持ってランナーを応援しました。

そのサルビアの種を幸吉選手の兄・喜久造さんが現在まで大事に育てつないできました。

今回55年ぶりに聖火が



円谷幸吉・レガシーサルビアの会

会長 安藤 喜勝さん

須賀川に帰ってくるので、この引き継がれてきた種で再び「サルビアの道」を復活させ、須賀川を赤く熱く盛り上げたいと思います。

これを機に幸吉選手の偉業を市民・県民だけではなく、国民が改めて思い起こすきっかけになつてもらいたいです。

また、来年3月28日の聖火リレー通過のときもサルビアを咲かせて応援することも検討しています。